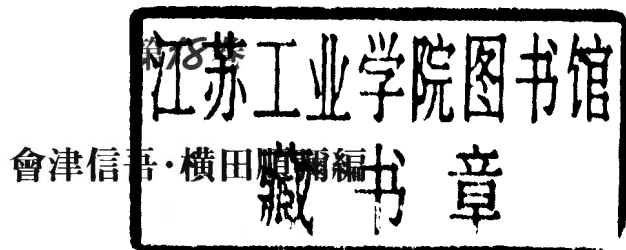


少年小説大系

少年SF傑作集



三一書房

少年小説大系 第18巻
少年SF傑作集

一九九二年五月三十一日 第一版第一刷発行

尾崎 秀樹
監修者 小田切 進

紀田順一郎

発行者 畠山 滋

発行所 株式会社三一書房

〒113 東京都文京区本郷2の11の3

☎03(3812)3131

振替東京9—84160

印刷 株式会社 新栄堂

晝美術印刷株式会社(扉・口絵・函印刷)

製本 株式会社 鈴木製本所

製函 高田紙器

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

©一九九二年

ISBN4-380-92547-1

Printed in Japan

例言〔會津信吾・横田順彌〕

本書には、本大系第一期『空想科学小説集』と同じく、明治末期より昭和終戦後にいたる、約五十年間の各時代を代表する少年読者を対象としたSF（空想科学小説）九篇を収録した。

作品の選出にあたっては、その時代における少年SFの特色の強い作品を、少年小説の完成度とともに重視した。当然のことながら、これらの作品は、その時代の社会情勢に微妙に関連してはいるが、本作品集では、『空想科学小説集』に比較し、よりエンタテインメント性の高い作品を、収録基準

のひとつにもしている。

作家の名前よりも、作品としての充実度やエンタテインメント性を重視したため、どうしても、詳しい調べのつかない作家、また無名作家の作品数点が並ぶこととなったが、本書が作品集であると同時に、少年小説の研究書として利用されることを願った結果であることを、おことわりしておく。

配列は『空想科学小説集』と同様、年代順に従ったが、どこから読んでいただいてもかまわないし、おもしろく読んでいただけると信じている。

少年S
F傑作集

目次

例言「會津信吾・横田順彌」

1

月露 げつろ
行客 こうかく

三百年後の東京

11

野村 のむら
大濤 だいとう

日本
青年 海底大探検

73

阿武 あぶ
天風 てんふう

極南の迷宮 きよくなん
めいきゆう

137

江見 えみ
水蔭 すいゐん

三千年前 せん
ぜん

173

村山 むらやま
槐多 かいた

魔童子伝 まどうじ
でん

215

小鹿 おが
青雲 せいうん

地球から「天の川」へ あまがわ

227

大津 おおつ
美智 よしとも

引力消滅 323

横溝 よこみぞ
正史 せいし

南海の太陽児 347 たいようじ

南沢 みなみざわ
十七 じゅうしち

緑人の魔都 453 りよくじんまと

解説（會津信吾・横田順彌） 539

年譜 547

凡 例

一、本大系のテキストは、原則として初出の雑誌掲載のものに準拠した。

一、本大系は、すべて現代仮名づかいにあらため、漢字は原則的に新字体で統一し、拗促音を使用した。

一、明白な誤字、脱字、衍字と思われるものは、これをあらためた。

一、難読漢字には適宜、ルビを補った。

一、カギ括弧、句読点等の用法は、全巻にわたって統一をとった。

少年SF傑作集

少年小説大系・18卷

月露行客げつろこうかく

三百年後の東京

I 世界無比の冒険

今日は未来研究会員の勝田友之進が、築地の東京公衆会堂に於て演舌をするというので、各地から寄り合うた傍聴者は無慮五千有余人、午前八時にはもう木戸が止まったという騒ぎ、後れて来た男女は木戸前に黒山の如く群衆し、その雑沓は一通りでない。

場内は立錐の余地もないという有様で、耳も痛くなる程の騒ぎ、宛がら刀根の大川が滝となつて千丈の底へ落下るかとも思はるる。

聴て本日の弁士勝田友之進は悠々と音響反射機の前に現われた、上を下への噪擾も一変して斉しくこれを見上げ、拍手喝采百雷の如く、暫時は他の物音が聞えなかつた。

弁士は年のころ三十前後、色浅黒い眼の凹んで大きい瘦ぎすの男で、当世（二十世紀の初め）流行の黒き文人服を着流し、静かに場内を見廻しながら喧囂の鎮まるのを待つて、徐むろに左の如く説き出した。

「諸君私は三百年前則ち二十世紀当初のもので、本年は正に三百三十一歳の老人である（大笑い）、これから私は世に生れた初めから今日この処に諸君と相見ゆるに至つたまでの経歴を概略で陳ようと思う」（謹聴謹聴、概略と云わずに成べく詳細に願いたい）。

「私は明治五年八月二十八日を以て駿河国富士江の濱に生

れましたが、幼少の時父母に別れ、叔母の手に養育られて二十歳になると、又々母の如く私しを愛して呉る処のこの叔母にさえ死なれました、其後私くしは真の孤独の身の上となりましたが、有難いことには叔母のお蔭で十九歳まで郷里の学校で相応の教育を受けた所から、小学校の教師となつて二年余を送り、足かけ三年という時少しく感ずる所があつて東京に出た、けれども無論学資というものの出所もなければ、種種の職業を為して苦学を致したのです。

それから青山の英和学校の貸費生となつて、同校の高等科を卒業したのは丁度二十五歳の時で、その後同校と今二三の私立学校に雇われて英語科の教師をして生活を立て居りました。

その頃から私しどもが二三の同志と共に未来研究会というのを始め、私の住宅を以て事務所となし——その頃私は麻布の谷町に居りました——私は会長に推され熱心に種々の方法に依つて未来を研究致して居りましたが、敢て秘密にしているという訳では無いませんが、人のこの結社を知っているものは誠に慚のうございまして近隣の人々でさえ噂をするものがなかつたとかいうことです。

こんな有様でしたから無論新聞や雑誌にも吹喋されたことも無いませぬが、別に騒ぎ立する必要が無いので其ままにして置たけれども、矢張り友人からその友人が聞き、それから其という工合に伝え伝えて入会を申しこむものもポツポツ出て来て、遂に七十余名の会員となり、烏合の兵でないか

ら熱心に、各々見込を付け多所を研究する。

この頃外国の或人が仮死に就て種々の關係を研究しているというのを聞いて、随分面白いことだと思つてみると、不図仮死というものは動物界に随分長い間保続しているものがあるということを考え、それから、人間も一定時間は仮死を保続することが出来るに相違ない、否寧ろ人間は彼等動物よりも多い時間を保続し得るの方法を考え出せぬ訳はない、何卒してこれを研究して見たいものと思つていたので「満場水をうったように、片唾を呑んで聞いている」。

弁士は水を一口飲んで咽を潤おし尚も演説を続けた。

「兎に角人体にも仮死の状態から暫らくにして蘇生するという例しは沢山もあることであるが、さて此仮死というやつは、果して幾時間若くは幾日ぐらい継続し得らるるもので、幾日を経たならば最早蘇生せしむることは出来ぬものであるかを實際に當つて試験して見たいと、いろいろ其方法や手段に焦慮していると、偶々或る医学博士と面会した折このことを尋ねて見ると、同博士は最も親切にこのことを取調べて呉ましたので、最近の学説や欧米諸大家の實驗説などを聞くことを得、大いに得る所がふえました。

段々面白くなって来まして如何かして之を實驗して見たいものだ様々に考がえましたがこれには、自分が直ちに犠牲となる外に好い分別がふいけません、止を得ず自身が一命を賭して此試験することに決心しました。

その試験というのは全体如何なことをするのかといひます

れば、先ず私が魔酔薬を用いて仮死の状態となり、十分防腐の方法を施こして貰つて玻璃の棺の中へ入られ、三百年後或方法に由て蘇生し得るや否やを世人に知らしめようという、随分危険な否この上もない冒險なことでした。

こんな事になつて見るとなまじ父母や妻子のなかったのは幸わいで、何の眷族もない所から死後の心配もなく、最この易く三百年間土中に安眠することとなった、その埋没所は少々ばかり縁故ある谷中天王寺の墓地と定め、手術その外の死後の処置は一切某医学博士に依頼し、尚お補助として私の親友両三名にも十分後事を頼んだ。

友人中でこれを諫めたのも数名あったが、余は断乎として初志を枉げなかつた、遂には到底思止まるまいと見て取つたか止めるものもなくなつて、明治三十五年三月二十二日愈々一先死ぬこととなりました。

この日の午前八時ごろであつた、余は数名の友人と医学博士某とに取囲まれながら、魔酔剤を服で静かに寝台に横たわつて眼を閉すると、博士は尚お皮下注射を施こした。

それから後は本年の三月二十三日の夕方までは一切覚えはないが、兼て約束も用意もあり且つ私と一緒に棺の中へ入てあつた博士の書面や、蘇生の際立会うた方々に聞いたことなど取まぜて御断することにしませう。

某医学博士は私の皮下静脈管に強烈なる防腐液を注射し、心臓および肺臓の活動を零位まで沈降せしめて全たく活力を失うに至つた後に、兼て準備の玻璃の棺に収めた、この棺の

中には防腐用空気を十分充たし、且つ一定の温度を永久に保ち得べき特別の装置をなし、棺を密閉してその外部を哥羅地安にて包んだのである、そしてこの玻璃製の棺というのは形状が長円筒であるから、斯う出来上った所は宛然一個の大きな繭である。

さて諸君よ観すれば千万劫も春夜の些夢に均しく、また呂翁が一炊の烟よりも果敢ない、三百年という短からぬ星霜を経る間、夢一つ見るということさえなく昏々と眠って居た私は忽然として蘇生したのである。

四下を見ると余が魔睡剤を服して横たわった彼の室ではなく、他の見慣れぬ寝台に羽毛の蒲団と毛皮の夜具とに包まれている、眼に入るものは悉とく異様の観を呈し如何も普通の娑婆とは思われないので、呆然として四辺を見廻わして居た、ハテ是れは新世界であらうか、又は玻璃筒中の夢であらうか。須臾経と年のころ五十内外と覚しき柔和なる男が微笑を含みながらこの室に入つて来て、ヤア勝田君もう全然醒めましたか、定めて不思議に思うでしょうがそれも当然です、今日は君が魔酔薬を服用されてから満三百年目です、イヤ昨日です昨日は君の三百ヶ年目の命日です。

段々この方の御咄を聞きますと、今年は神武天皇二千八百六十二年、西暦二千二百二年即ち二十三世紀だということが分り、それから私が谷中の墓地に入ってから丁度十年目に、我が未来研究会員等が余が寢室を発掘して仮死体を見舞つて呉れた事から、尚お数十年を経過しても十分蘇生の見込があ

るといふので再び旧の如く埋たこと、政府が科学の進歩を助けんが為に余の仮死体を保護することとなつた事、その後外国との戦争が打ち続き為に人心恟々として余は殆んど世人に忘却し去られた事など逐一承たまわつたです。

さて私にこれ等のことを咄して呉れ、且つ種々手厚い介抱をして下さるその人が私に如何なる関係があつて斯まで親切にして下さるだらうという事は諸君の共に問わんと欲する処であらうと私は考がえるのです、実に当然のことです、私もこれを知りたかつたです、即ち愛に私の再生の大神恩を諸君に紹介致しましょう。

余が再生の恩人は津沼桑翁と申さるる方で、深く私の希望に同情を寄せられ、記録や口碑に伝えられた所謂余の命日から本年が三百年目に相当していることを発見せられ、同氏の知己朋友と相談つて、私の仮死体を発掘せんことを政府に請願したので、政府が之を許可すると数名の大家に立会を乞ひ、悉皆自費を以て余の寢室を掘上げ、手を尽して蘇生の法を施して下さるのであります。

尚お同氏の御咄に由て承知致しましたのは、同氏がこの事に就て政府に請願した時、十中の八九までは蘇生とは思わなかつたので、多分徒勞に属するという事は人も云えば自分も観念して居たです、然るに一通ならぬ苦心の結果として幸いにも復活するに至つたのは単に同氏の親切と熱誠とに依るので、私は之に感謝するの辞がない、同氏も骨折効があつたといふので喜こばるること此上なく、私に向つて君の運